

北海道言語研究会
研究例会報告

2022 年度の研究例会は以下の日程とプログラムで開催した。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

・ 第 23 回研究例会

(2022 年 9 月 28 日 (水) 13:00--15:35; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室)

13:00 開会

13:10--13:50

小野真嗣 (室蘭工業大学)

「英語語彙表の再構築とデジタル教材化の検討

ーGIGA スクール構想による 1 人 1 台端末環境を背景にー」

Brown Corpus に基づくアメリカ英語の語彙頻度調査に端を発し、米英豪の言語変異調査も含め、コンピュータ処理による英語の語彙研究が進み、これまでに研究成果としての語彙表が作成されている。これらは辞書記述の変革をもたらし、また効率的な語彙学習および習得に向け活用され、それぞれの基礎資料となっている。一方、情報学の分野からも WordNet 研究が進み、語彙が有する語彙間の関係性を示す概念辞書の制作が行われており、多言語化も行われている。本研究では、これら既存の言語資料をテキスト処理によって統合し、公立学校で進む GIGA 端末普及に合わせたデジタル教材化に取り組んでいる。本発表においては、現時点の研究進捗状況を報告する。

13:55--14:35

塩谷亨 (室蘭工業大学・ひと文化系領域)

「ポリネシア諸語の記述における形態素の分類について」

ポリネシア諸語は孤立語的特徴が優勢であるが一部派生接辞も用いることが指摘されてきた。形態素の分類としては、語(word)と接辞(affix)に加えて小詞(particle)という分類が一般的に用いられてきた他、まれに接語(clitic)にも言及されることがあるが、必ずしも分類基準が一致していない場合もある。また、先行研究によっては独自の形態素の分類を提案している場合もある。様々なポリネシア諸語の記述における形態素分類とその基準を概観し、ポリネシア諸語の形態素分類における問題点について考察する。

13:40--15:20

三村竜之 (室蘭工業大学・ひと文化系領域)

「アイスランド語アクセント調査報告」

2022 年 9 月にアイスランド共和国レイキャヴィーク市にて実施したアクセント調査の結果を報告する。主な内容は次の通り: 1) 2 音節以上の外来語のアクセント型（強勢型）について; 2) 同系統の諸言語・諸方言における上記の外来語のアクセント型と、アイスランド語におけるアクセント型との異同について; 3) 上記 2) を踏まえてのアクセント型の比較分析（変化の有無, 方向性, 契機等）; 4) アイスランド語における外来語アクセントの「揺れ」について。

* 本研究調査は JSPS 科研費の助成を受けたものである（課題番号: 20K00594）

15:25--15:35

総会（『北海道言語文化研究』編集委員より報告事項）

15:35 閉会

・第 24 回研究例会

（2023 年 3 月 24 日（金）10:00--15:00; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室）

10:00 開会

10:05--10:45

坂本裕子（室蘭工業大学・ひと文化系領域/国際交流センター）

「大学の第二外国語日本語学習者の学習意欲を高める活動」

日本の高等教育においては、2014 年ごろからアクティブ・ラーニングの導入が始まっている。日本語教育では、言語教育のコミュニケーションな特性を活かし、学生のニーズ、レベルに合わせて、ピアラーニング、TBLT（Task Based Language Teaching）、CLIL（Content and Language Integrated Learning）等が応用されている。本研究では、アクティブ・ラーニングで課題とされるグループワークがうまくいかない、活動の到達点が明確でない、個人に対する評価が難しい等の課題のうち、グループワークでの学び方に焦点を当てる。レベル差のある日本語を専門としない学生を対象とした日本語クラスでのアクティブ・ラーニングに Nudge 理論を応用し、学生の学びの質の向上と複合的な学びを目指す。

キーワード：アクティブ・ラーニング、日本語教授法、日本語読解、Nudge、社会人スキル

10:50--11:30

種石 悠（北海道大学大学院医学研究院・客員研究員）

「北海道日本海側地域におけるオホーツク文化の考古学的研究（1）」

オホーツク文化は北海道オホーツク海沿岸地域を中心に確認されている考古学的文化である。本発表では、検討が不足している北海道日本海側地域のうち、道南部奥尻島のオホーツク文化期資料について検討を加える。検討の結果、奥尻島のオホーツク式土器に、特有の施文技法が高い頻度で観察された。これは、奥尻

島に独自の地域色をもったオホーツク文化が形成された可能性が高いことを示している。奥尻島は、従来言われてきたように他地域のオホーツク文化人の季節的キャンプ地などではなく、道南部日本海側地域におけるオホーツク文化期の定住的な拠点のひとつだったと推測される。また、島内の青苗砂丘遺跡から道東部に特有の擬縄貼付文をもつ壺形土器が出土したことは、奥尻島のオホーツク文化人たちが道北部だけでなく、道東部の集団とも交流をしていたことを示しており、天然の良港を擁したこの遺跡が交流の拠点としても機能していたことを示している。

11:35--12:15

三村竜之（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「現代アイスランド語における二重母音にまつわる諸問題」

現代アイスランド語の音声・音韻の研究の歴史は長く、様々な事柄が明らかとなっている一方、二重母音に関しては未だ不明な点が残されている。研究者の大半が母語話者であり、また近年は音韻理論に基づく研究が主流のためか、非母語話者の研究者の目（耳）を通じた観察では奇異に映る解釈や現象も手続かずのまま残されている。本発表では、発表者がフィールドワークを通じて採取した一次資料の観察・分析に基づき、特に二重母音の長短の区別や音節量、モーラ等々の問題点について暫定的な解釈案を含めた私見を述べる。

* 本研究調査は JSPS 科研費の助成を受けたものである（課題番号: 20K00594）

13:15 --13:55

山田祥子（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「サハリン先住民ウイルタの《文学》とは？」

ウイルタはサハリン島の先住民族で、ツングース諸語のひとつであるウイルタ語を母語とする。ウイルタ語は固有の文字をもたないが、昔話、おとぎ話、語り物、即興歌、なぞなぞなどが口頭で伝承されてきた。これらの口頭文芸はウイルタの伝統的な《文学》といえる。しかし、2008 年にウイルタ語の書き言葉（ロシア字による書記法）ができてから、ウイルタ語による表現が多様化している。特に2010 年以降に発表または採録されたものには、詩、他言語からの翻訳による歌や文学作品もみられる。本発表では 2023 年 3 月現在までのウイルタ語表現のジャンルを概観・整理し、ウイルタの《文学》をどのように説明できるか考える。

14:00--14:40

塩谷 亨（室蘭工業大学ひと文化系領域）

「ポリネシア諸語における主語（行為者含む）と目的語の表示について」

様々なポリネシア諸語の先行研究を基に、各言語における主語（行為者含む）と

目的語の表示について概観した。ポリネシア諸語では名詞句の機能はそれに付加される前置詞により表示される。文の主語（行為者含む）と目的語に付加される前置詞については、おおよそ三つの事例に分類される。すなわち: i) 行為者を表す前置詞<e、na>が付加される; ii) 被動者/受益者を表す前置詞<i、‘i（言語によっては‘iの代わりにki、gi等）>が付加される; iii) 上記のi)とii)で示した前置詞のいずれも付加されていない<前置詞無し（言語によっては前置詞‘aが付加）>の三つである。言語により<>内に示した前置詞のいずれか一つ又は複数が用いられる。また、一部の言語では、名詞に付加される冠詞と上記の前置詞との間に選択上の制限（例：トンガ語では定冠詞、ハワイ語では不定冠詞との間）がみられる場合がある。

16:40--15:00

総会（『北海道言語文化研究』編集委員より報告事項）

15:00 閉会

スタイルシート

- (1)使用言語: 日本語もしくは英語。
- (2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイルを提出する。宛先: HLCJournal@gmail.com スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。(URL: <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>)
- (3)余白(マージン): 上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
- (4)行数: 37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (5)字数: 全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (6)フォント: 和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、unicode を用いることとする。
- (7)ポイント数および書体:
- | | | |
|--------|-----------|------------------|
| 題名: | 18 ポイント | 太字 中央寄せ |
| 氏名: | 14 ポイント | 太字 中央寄せ |
| 要旨: | 9 ポイント | 「要旨」という文字のみ太字 |
| キーワード: | 9 ポイント | 「キーワード」という文字のみ太字 |
| 本文: | 10.5 ポイント | |
| セクション: | 10.5 ポイント | セクション番号と題は太字 |
| 謝辞: | 9 ポイント | 「謝辞」という文字のみ太字 |
| 注: | 9 ポイント | 「注」という文字のみ太字 |
| 参考文献: | 9 ポイント | 「参考文献」という文字のみ太字 |
- (8)タイトルおよび氏名: 和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例: John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
- (9)ページ数: 原則として図表を含め、20 ページ以内とする。
- (10)要旨: 日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
- (11)キーワード: 5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
- (12)セクション (節): セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
- (13)段落: 両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書き

方になっていること。

(14)注:通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、注の番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに*(半角アスタリスク)を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献:文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介:①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④ URL、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

(2021 年 3 月 31 日改定)

『北海道言語文化研究』 投稿規程

1. 『北海道言語文化研究』 への投稿は、資格を問わない。
2. 投稿内容は、未発表であり、かつ投稿時に、他の学会等への発表の応募または投稿を行っていないものに限る。
3. 原稿の応募は『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイルを提出する。
宛先: hlcjournal@gmail.com
4. 原稿の書式は、スタイルシートに準拠させる。
<https://u.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>を参照。
5. 本研究会による電子化による公開を、著者が本研究会誌に投稿した時点で許諾したものとする。<https://u.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html>
6. 締切は各年度の 11 月 30 日 23:59 (JST)とする。
7. 投稿された論文については、2 名の匿名査読者によって査読を行う。適切な査読者の手配ができない場合は、投稿が受理されないことがある。
8. 著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし、内容の変更は認めない。
9. 稿料は払わない。

(2021 年 3 月 31 日改定)

北海道言語研究会 <https://u.muroran-it.ac.jp/hlc/>

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気の集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

『北海道言語文化研究』への投稿について

研究論文の投稿をご希望の方は、本研究会WEBページの「スタイルシート」で投稿規定をご覧になり、スタイルシートに則った原稿を、HLCJournal@gmail.comまでお送りください。締め切りは11月30日です。原稿受領後、査読を実施し、その結果に基づいて編集委員会が掲載の可否を決定します。

研究発表について

本研究会では研究例会を3月と9月に開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をemailでhokkaidolinguisticcircle@gmail.comまでお送りください。持ち時間は発表30分、質疑10分です。発表要旨は『北海道言語文化研究』の研究例会報告に掲載いたします。開催日時に関しては、受付後、後日メールや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

北海道言語文化研究 第21号

2023年3月31日発行

発行者：北海道言語研究会

投稿宛先：HLCJournal@gmail.com

連絡宛先：hokkaidolinguisticcircle@gmail.com

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会窓口

北海道言語文化研究

第21号

2023年

論文

- ウイльта語北方言テキスト:お母さんのこと 山田 祥子 1
- アイヌ語の継続形式+完了形式の意味機能 馬 長城 17
- 「東工大多言語音声コーパス アイランド語」<その2>方言的特徴を探る 三村 竜之 35
- マオリ語における魚の成長段階名称について 塩谷 亨 59
- 新約聖書「ローマ人への手紙」における裏返し構造:Drake モデルにみとめられる
キアスムスに基づく検証 大喜多 紀明 71
- Getting tactile: A study of plasticine modelling John Guy PERREM 95
- An Anthropomorphic Kanji-Verse: Using mnemonic stories to remember
the meaning and writing of Chinese Characters Scott SUSTENANCE 117

研究報告

- 英語授業における効果的なコミュニケーション指導の有り方について
ゲイナー ブライアン、ペレム ジョンガイ、島田 武、
塩谷 亨、サステナンス スコット、山田 祥子 131

Journal of Language and Culture of Hokkaido

No. 21

2023

Articles

- | | | |
|--|-------------------------|------------|
| A Text in the Northern Dialect of Uilta: Mother | Yoshiko YAMADA | 1 |
| Meaning of the Progressive Form + the Perfect Form in Ainu Language | Changcheng MA | 17 |
| Review: Icelandic in <i>Tokyo Institute of Technology Multilingual Speech Corpus</i>
#2: An Inquiry into Dialectal Features | Tatsuyuki MIMURA | 35 |
| Distinctive Fish Names for Stages of Growth in Maori | Toru SHIONOYA | 59 |
| The Reversal Structure of the Epistle to Romans in the New Testament: A Verification
Based on Chiasmus as Seen in the “Drake Model” | Noriaki OHGITA | 71 |
| Getting tactile: A study of plasticine modelling | John Guy PERREM | 95 |
| An Anthropomorphic Kanji-Verse: Using mnemonic stories to remember the meaning
and writing of Chinese Characters | Scott SUSTENANCE | 117 |

Research Report

- | | | |
|--|--|------------|
| Effective Ways of Instructing Communicative Language Activities in English Classes | | |
| Brian GAYNOR, John Guy PERREM, Takeshi SHIMADA,
Toru SHIONOYA, Scott SUSTENANCE, and Yoshiko YAMADA | | 131 |

The Hokkaido Linguistic Circle